

黒川本 讃岐典侍日記

宮内庁書陵部蔵

Sanukinosuke Nikki

The Kurokawa manuscript in the Archives of the Imperial Household

三谷 幸子

宮内庁書陵部蔵の伝本讃岐典侍日記は、既に発表されている

八洲文藻所収本があるが、それに加えて、この度発表させていた
ただ黒川家旧蔵本（以下黒川本と呼ぶ）は、近世国学者として、
本居宣長の学風を継いで一家をなした黒川家の蔵本である。

讃岐典侍日記の伝本および本文研究についての文献については、
本学研究論集第25巻（昭和53年2月刊）に発表したが、拙著
『校本讃岐典侍日記』出版後に発表された伝本は次の二本である。

1、清水浜臣旧蔵本讃岐典侍日記、桃園文庫所蔵本

岩清水 尚

（語学文学第十号 北海道教育大学語学文学会 昭47・3
・20刊）

2、小山田本讃岐典侍日記覚え書 彰考館文庫蔵

佐藤圀久

黒川本 讃岐典侍日記

翻刻彰考館文庫蔵・小山田本讃岐典侍日記

佐藤圀久・石田和子

（群女国文第5号群馬女子大短期大学国文学研究室 昭51

・3・10刊）

以上の二本を加えて、次の要領で論を進めることにする。

- 一、讃岐典侍日記伝本と現存形態
- 二、黒川本讃岐典侍日記の体裁
- 三、黒川家について
- 四、まとめ
- 五、翻刻 宮内庁書陵部蔵 黒川本讃岐典侍日記 上下巻

『讃岐典侍日記』の伝本について、現在所在が明らかかなものは三十二本である。しかし、本文を大きく訂正するほどの異本はなく、殆どが脱落や書写の誤りによるもので、卓越した善本といえる江戸初期をさかのぼる古写本がないのは残念である。しかし、原本が書かれた天仁二年（一一〇九）の後、早くから人々に読まれていたことが、『讃岐典侍日記』より六十年余り後に完成した『今鏡』に記されている。万寿二年（一一二五）から嘉応二年（一二七〇）にわたって記述している『今鏡』の玉章の段に「この帝、三十にだに満たせ給はぬ、世の惜しみ奉る事限りなかるべし。その御あり様、内侍の典侍讃岐とか聞えし、細かに書かれたる書侍りとかや。人の読まれしを、ひとかへりは聞き侍りし。この中にも、御覧じてやおはしますらむ。」（日本古典全書・板橋倫行・昭25・10による）

このように、今より約八百年を逆る平安末期から鎌倉時代にかけては、原本に近い形態で人々に読まれていたと考えられる。

その後、鎌倉末期元徳二年（一一三三）から元弘元年（一二三三）頃の執筆である『徒然草』第百八十一段に「『降れく粉雪、たんばの粉雪』といふ事、米搗き篩ひたるに似たれば、粉雪といふ。『たまれ粉雪と言ふべきを誤りて『たんばの』とは言ふなり。『垣や木の股に』と、或物知り申しき。昔より言ひける事にや。鳥羽院幼くおはしまして、雪の降るにかく仰せ

られる由、讃岐典侍が日記に書きたり。」（徒然草全注釈・安良岡康作・角川書店・昭35・10による）とある。

『枕冊子』と共に古典隨筆の双璧とされている『徒然草』に、讃岐典侍日記のことが記されていることは、高い文献的価値を持つ兼好の隨筆である故に、信頼度も高く、この日記が中世に比較的多くの人々に読まれていたと考えることができる。この頃に乱世をまねく南北朝の争いがおきているが、それより、すこし時代を経て、鎌倉後期か室町前期の成立とみられる日本最古の図書目録である『本朝書籍目録』に「讃岐典侍日記三」と記されている。

江戸時代に入って、文政二年（一八二〇）に藤原美波留の書いた『百人一首抄』の「麻生園蔵板書目」にも「讃岐典侍日記圖解三卷近刻」と記され、未刊の書とはいえ、この日記を三巻とした記録があるが、現存伝本においては三巻本は全く見当たらない。

そこで、先学の方々の現存形態の意見を纏めてみると、

三巻本説（下巻欠落説） 玉井幸助 宮崎莊平 瓜生原和子

三巻本説（中巻欠落説） 尾崎知光 森田兼吉 橋本奎子

二巻本説（現存の上下巻） 石壁敬子

同じ欠落説でも内容において論説が違いますが、結論的に大胆な分類をすると、現在では右の論旨をみる事ができる。

現存伝本においては、江戸中期をさかのぼるものはないが、奥書による書写年代を記したものにおいては、初期のものもある。年代順にその書写年代と伝本名を記してみる。ただし、そ

の書写年代をそのまま書写した伝本の場合も同じ年代とした。

書写年代	西暦	伝写本名
寛永十六	(一六三九)	秘書郎本系伝本
慶安元年	(一六四八)	高橋貞一博士所蔵本
元禄甲戌秋	(一六八八頃)	水戸彰考館小川彦兵衛写本
安永七年	(一七七七)	賀茂季隆本
安永八年	(一七七八)	多和文庫本・東大史料編纂所本
天明四年	(一七八四)	神宮文庫所蔵・勤思堂本
寛政元年	(一七八九)	神宮文庫所蔵・御巫書本
寛政四年	(一七九二)	神宮文庫所蔵・清渚集収所本
寛政九年	(一七九八)	桃園文庫上巻本(貞仲明書写)
文化二年	(一八〇五)	桃園文庫蔵清水浜臣旧蔵本
天保十四年	(一八四三)	宮内庁書陵部所蔵八洲文藻所収本
慶応二年	(一八六八)	西尾市立図書館所蔵 岩瀬文庫本

右の書写年代を見ると、やはり、国学の隆盛をみた江戸中期に多く書写されている。勿論この期には、讚岐典侍日記だけでなく、古典研究の文献学的考証が重んぜられ、近世学術の発達と国家意識の勃興に伴なって、あらゆる古典が甦えたと云えよう。

では、黒川家の蔵書『讚岐典侍日記』は、どの系統に位置するのであろうか。

まず、上巻末の奥書と下巻末の奥書によって、群書類従本系であることが知られる。宮内庁書陵部の橋本不美男氏のお言葉によるならば、「黒川真頼の師であり、養父でもあった黒川春村は、保己一門下として、続群書類従の編纂に参加しており、その関係から、あるいは、本書は群書類従本版本のもとをなすものでなからうか」とのことである。左に黒川本の上下巻の奥書を記し、つぎに、現存伝本の一覧表を記す。

上巻奥書

右洋備 仙洞御本使中書奉廣太神景明
 奥書寫之共清剛寺更相具房卿一校了落字魚
 魯等不可勝計重可加校正者也

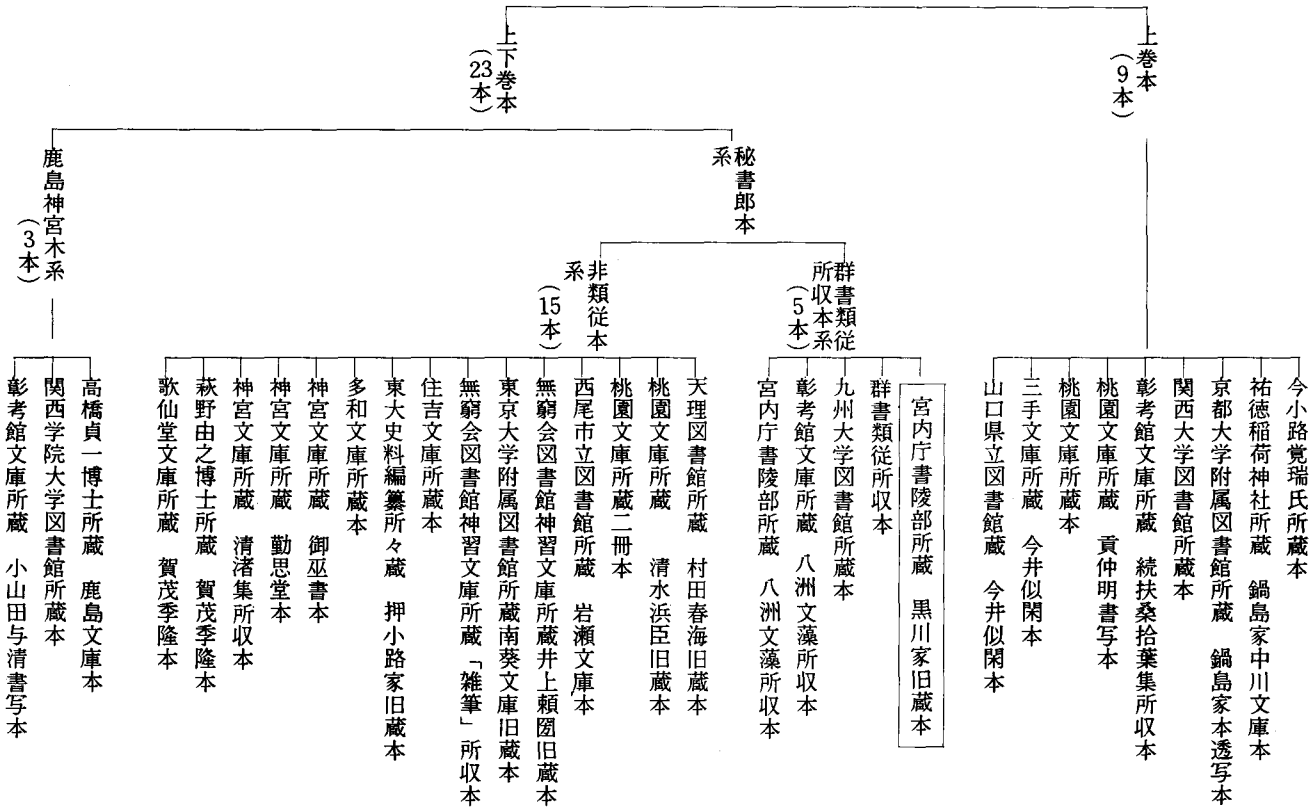
寛永十六檢念二 秘書郎

下巻奥書

右申精 官本俾源極痛 復法 書之与岩倉
 中將一校畢
 寛永十六檢尻十六 秘書郎

右讚岐典侍日記以余任務奉本書寫以百苑屯宗園校合

讚岐典侍日記伝本一覽



二

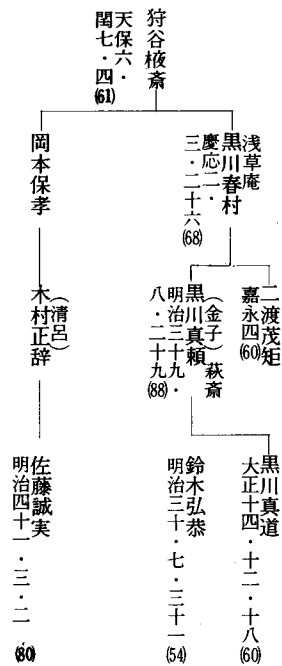
本の体裁については、上下一冊本で、縦二六・七cm、横一八・七cm、袋綴上下合巻の一冊本、表紙は、金茶色波模様を捺染した楮紙、表紙左に墨でかこみ枠をした楮題簽で「讚岐典侍日記上下合巻」と示されている。本文用紙は楮紙、墨付上巻二七葉、下巻三七葉、巻末遊紙一葉、一面は各十行書、一行の字詰は二十三字前後、本文巻首には、右下方に「黒川真頼藏書」の単画方朱印があり、その下に「黒川真頼」の丸印がある。巻頭に「検校保己一集 日記部」とあり、左側に、単画朱印で「黒川真道藏書」の印がある。奥書は群書類従版本と一致し、江戸末期の書写と思われる。

三

第一葉の右下方に、黒川真頼藏書の印と黒川真道藏所印が見られるが、江戸後期の国学者黒川春村の学統を継承し、後に養子となった黒川真頼の藏書を、子息の真道がうけ継いで藏書としたものと思われる。

黒川家の系図を読史総覧（人物往来社・昭41・2刊）の国学系図でみると次のように記されている。

黒川春村系



黒川家の家学を形成した黒川春村は、徳川末期（一七九九～一八六六）の国学者で寛政十一年江戸浅草田原町に生まれる。はじめ二世浅草庵深沢守舎に従って狂歌を学び、その後をついで薄庵と号し、のち三世浅草庵の号をついだが、これを、笠亭仙果に譲って和歌をよくし、さらに、狩谷棧齋について古学を

究めた。清水濱臣、岸本由豆流、伴信友らと交わり、本居宣長の学風を継いで一家をなした。また、国語学、音韻学に長じ、学風は考証に秀でていた。著書に「墨水遺稿」「地頭名義考」「音韻考証」などがある。真頼の養父である。

黒川真頼（一八二九～一九〇六）は、文政十二年十一月上野桐生町に生まれ、本姓は金子氏。幼名は嘉吉、号は秋齋。幼い時より類語強記、早くより江戸に出て黒川春村について国学をまなび、のちに、黒川家の養子となり、家学を継承した。性質は、温良にして篤学、歌風もまた平易真率をもって知られ、

晩年は、空海の書風を愛し、造詣するところ深かった。また、有職・風俗の研究は、もつとも力を注いだところで編著も多い。現今の裁判官の制服は、真頼が政府の命によって、わが国の古代の服装を参酌して案出したものといわれている。

真頼は、大学・芸術・教育の方面にわたって貢献し、その著書には、「皇位継承篇」、「考古図譜」、「語彙国史要略」、「工芸志科」、「歴代天皇諡号統例」、「日本文典大意」、「古事類苑」および語彙の編纂にも参与した。維新後は、文部省、内務省博物局などに出仕し、のちに、東京大学教授となり、旭日小授章をたまわった。

『国学者著述綜覧』によれば、(備考)に、「東京大学教授、宮内省御歌所寄人、東京帝国大学名誉教授、帝国学士院会員、正四位勲四等文学博士。国語及び有職に精通し、文学歌学にも自得する所あり。」と記載されている。

『日本人物文献目録』による文献を左に転載すると、

○黒川真頼先生言行録 佐藤利之 国学院雑誌 一二の十一

二 明治39年

○黒川真頼全集六卷六冊 黒川真頼編 国書刊行会 明治42年

〜43年

○黒川真頼伝附著述目録 黒川真頼編 大正8年

○黒川真頼先生の事蹟、過渡期の学者伝のうち。大森金五郎

中央史壇、十三の十一 昭和2年

○先師の面かけを描く、文学博士黒川真頼先生 植木直一郎

国学院雑誌 四十六の十二 昭和十五年

○近代文学研究叢書八 昭和女子大近代文学研究室編 同大学

昭和33年

○近代文学資料研究日本文学篇、一四五、黒川真頼 甲斐知恵

子 学苑 昭和33年

○黒川真頼略伝 国学院大学図書館編刊 神道書籍解説目録

第一輯 昭和35年

黒川真道(くろがわまなみち)(一八六六〜一九二五)は、真頼を父として、慶応

二年九月十日群馬県桐生市四丁目に生まれる。父真頼の学統をつぎ、明治二十一年文科大学古典講習科を卒業し、明治二十二年古事類苑の編纂を囑託せられ、同年より帝国博物館に勤務し、

明治三十二年五月一日より明治三十四年七月二十日まで、東京帝国大学文科大学講師に囑託せられ、国語国文学史を講じ、

邦文帝国美術史編纂委員を命ぜられた。明治四十二年三月に日本教育文庫編纂のため、一時帝室博物館を退官し、翌四十三年

四月ふたたび東京帝室博物館に勤務し、それより死去するまで勤続した。大正十四年十二月十八日、享年六十才で、東京市浅

草区小島町で死亡する。著書に、「墨水一滴」「日本歴史文庫」「日本風俗図会」「喫茶史料」「越後史誌」などがある。

四

黒川本讃岐典侍日記は、上巻一葉に「檢校保己二集」と示されていのように群書類従本である。九州大学図書館所蔵本は、このような識語は一葉の最初に一切記されていないが、群書類従本に類し、この三本の伝本は、墨付六十四丁、一葉十行書、一行二十三字前後、字体も酷似している。ただ、黒川本のア行、ワ行の使用が群書類従本と全く同じであるのに対して、九大本は、八洲文藻本の二本と同じア行、ワ行の校異を持っており、また、それは非類従本系とも同じである。

八洲文藻は水戸藩主齊昭公編纂によるもので、一葉の最初に「八洲文藻巻第 権中納言従三位源朝臣齊昭編集」の識語があり、水戸彰考館所蔵本と、宮内庁書陵部所蔵本の二本あるが、群本、黒川本、九大本の二本と共に、この五本は、奥書、本文の校合などから群書類従本系と考えることが出来る。

そして、この五本のうち、校異の上からも黒川本が最も群書類従本に酷似しており、群本を底本とすると、殆ど校異がなく、九州大学図書館所蔵本がそれに近く、八洲文藻本の二本がこれに次ぐものである。

この五本自体のもつ大きな異同はないが、例を挙げると、「を。こない・をよぶ・をよはかる・をとる・をしあつ・をし入る・をしあく・をとる・をとし・をとく・をく」等の「を」は、八洲文藻本および非類従本系はア行の「お」を用いており、九

大本は、数においては少ないが同じ校異を持っている。また、反対に、八洲文藻本の二本と九大本は「おり・おします・おさなし」などがワ行の「を」を用いており、類従本の「まいる」は、黒川本と九大本が、同じく「まいる」に対して、八洲文藻本の二本は、すべて、ワ行の「まゐる」となっている。また、「よはげ・さはぐ・ことほり」などハ行であるのに対して、八洲文藻本の二本は「よわげ・さわぐ・ことわり」など、ワ行を用いている。以上の場合、非類従本系の諸本は、殆ど八洲文藻本と異同を同じくしている。

それでは、校合の結果校異といえるほどのものはみられなかったが、群書類従本と黒川本の異同を左に記載する。

〔群書類従本〕 〔黒川本〕

上巻

五オ 8 事 事(略字)

五ウ 9 外 外(略字)

六オ 6 おほしめさは おほしめせは

六ウ 7 いかにたえさせ いかにたゝさせ

八オ 7 いみしう いみもう

二オ 6 ひさけ^{提子} ひさけ

下巻

元ウ 10 君はいはけなく^五 (五)の字なし

元オ 3 興しまいらせしは 興しまいらせし

四オ 9 くしてと。
 四ウ 6 ひきあて
 吾オ 9 おもひつ、け
 吾オ 10 をさ。れたる
 吾ウ 9 御事と。
 吾オ 7 わらは董
 吾オ 4 心地すると
 吾オ 7 いへく〜とひきむけ
 吾ウ 5 なかりし
 吾ウ 1 人たちをみの

くしてす。
 ひきにて
 おもひつけ
 をた。れたる
 御事を。
 (董)の字なし
ルト心地すると
 いへく〜とひきむけ
 ないりし
小忌人たちをみの

以上が、二本の伝本の異同である。管見では上下巻の全文を通して、書写の誤りとみられるこれらの異同だけしかみられず、黒川本が、いかに類従本と近い関係にあるかが知られる。しかし、殊更に挙げるほどの異文は見出せなかつたが、近世国学者で、清水浜臣、小山田与清などと交流を持ち、保己一門下としてその力を問われるほどの黒川家旧蔵本を現存伝本に加えることが出たことは、本文研究に一冊でも多くの伝写本がのぞまれる折に、まことにありがたいことである。

黒川本紹介に当つては、原本所蔵の宮内庁書陵部と、同所の橋本不美男氏に、早くから未紹介の黒川本を拝見させていただきました。き、発表のお許しも得ておりながら、今日に至りましたことを、この紙面をかりてお詫び申し上げますと共に、全文の写真など多大なご便宜を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

参考文献

書名	執筆者	発行所	出版年月
国学者著述綜覧	関 隆治編	森北書店	昭18・6
大人名事典 二	下中弥三郎編	平凡社	昭28・11
讀史総覧	監修葉田 淳 今小路寛瑞 三谷 幸子	人物往来社 初音書房	昭41・2 昭42・12
校本 讃岐典侍日記	上田 萬年 芳賀 校閱	名著刊行会	昭47・5
国学者伝記集成	左藤 直助 平田 耿二	東京堂	昭48・11
新刊 世界人名辞典	下中 邦彦	東京堂	昭49・6
日本人物文献目録	片山 依子	相愛女子短大 国文研究室	昭52・3
讃岐典侍日記の伝本にみられる写者および所持者について			

翻刻 宮内庁書陵部蔵 黒川本讃岐典侍日記

本文には便宜上分段をつけ、和歌の部分は一行あけにした。分段は拙著校註讃岐典侍日記・笠間書院刊昭51・4によった。

讃岐典侍日記 上

序

五月の空もくもらはしく田子のもすそもほしわふらむとこと
はりも見えさらぬたに物むつかしきころしも心長閑なる里居に
常よりもむかし今の事おもひつゝ、けられて物あはれなれははし
を見出してみれば雲のた、すまひそらのけしき思ひしりかほに
村雲かちなるを見るにも雲井のそらといひけんひともことほり
と見えてかきくらさるゝ心地そするのきのあやめの雲にことな
らす山ほとゝきすも緒ともに音をうちかたらひてはかなく明る
夏の夜なぐすきもていそのかみふりにしむかしの事を思ひひ
てられて泪と、まらす思ひ出れば我君につかうまつる事春の花
秋の紅葉を見ても月の曇らぬ空をなかめ雪のあした御ともに侍
らひてもろとも八年のはる秋つかうまつりし程常は目でたき

御事おほくあしたの御をこなひ夕の御笛の音わすれかたさにな
くさむやといつる事ともかきつゝ、くれは筆のたちともみえず
きりふたかりかて硯の水に涙落そひて水くきの跡もなかれあふ
こゝちして泪そいと、まさるやうにかきなとせんにまきれなと
やするとて書たる事なれば姨すて山になくさめかねられてたへ
かたくそ

一 六月二十日のことぞかし

六月廿日の事そかし内瀬河は例さまにもおほしめされさりし御け
しきともすれはうちふしかちにて是を人はなやむとはいふなど
人々はめもみたてぬと仰られて世をうらめしけにおほしたりし
ものをことおもらせさせ給はさりしおり御祈をしつるに有ける
御事をもゆつりまいらせらるゝと我さたにもよはぬ事さへそ
おほゆる

一一 御ごこち大事におもらせたまひて

かくて七月六日より御心地大事におもらせ給ひぬればたれも月ころとても例さまにおほしめしたりつる事はかたきやうなりつれともこれかやうにくるしけに見参らする事はなくて過ぎせ給つるかとおほしませはいかならんするにかとむねつふれて思ひあひたりその頃しも上臈たちはりありてさふらはれずあるは子うみあるは母のいとま今ひとりはどうよりもこもりて此二三年まいられず御めのとたち藤三位ぬるみ心ちわつらひて参らす弁三位は東宮鳥羽のは、もおほしまさておひた、せ給へは心のま、にさふらはるへくもなきにあはせてそれも此ころおこり心地にわつらひてた、大式三位われくして三人そさふらふされはた、あやしの人のわつらふたに人のいとまいりしたしくあつかふ人おほくほしきには是はましてほし日のくる、ま、にたへかたけにおほしめしたれば院白河にかくと案内申さすおとろかせ給ひてちかくて御ありさまきかんとて我に北の陣に御幸ありてと奏すかくくるしうおほしめしたればおほとなふら例よりもちかく参らせなとす程にた、消にきえ入せ給ひぬあないみしとなきあひて内大臣雅實関白忠實殿まいりてつと侍らはせ給ふ大かたののしりあひたり増兼僧正頼基い増繁き律師増繁そうけん増繁律師など召にやりつ、らいき律師すなはち参りて経よみ佛くときまいらせらるるほとにしはしはかりありて打身しろきせさせ給ふに今少しの、しりあひぬ経よまる、をきかせ給ひて今は益やくあらしした、

かりうつせよと仰られ出たれば物つくものなとめしてゐてさ
んりうつさる、おひた、しきはをしはかるへしうつりてその事
とはいはてかほめきの、しるさまいとおそろしすこし御かゆな
とまいらすればめしなとすれば嬉しきは何にかはにたる大臣は
あるかと、はせ給へは大とのいらせたまひてさふらふよし申給
へは御幸は成ぬるかとはせ給へはしか成候ぬと申させ給へは
まいりて申せ今は何事もやくさふらはした、させ給ふ尊勝寺に
て九壇の護摩と懺法とさふらふへきなり又侍らはむすらん事はな
に事もこよひ侍らふへきそあすあさてさふらへき心地し侍らす
とおほせらるればあまり護摩こそおひた、しく侍らへと申給へ
はこはいかにいふそかはかりに成たる事をはと仰らるれば御直
をしの袖を顔にをしあて、立たまひぬそれをきかむ御めのとた
ちもいかはかりおほえむ大殿かへり参らせたまひてされは去年
をと、しの御事にもさるさはさふらひしかと宮鳥羽の御年のを五才
なくおほしますよりてけふまで侍らふにこそとなむはへると
奏せらる、にそ何事もた、こよひさためさふらふへきそと仰ら
るればさは此御事にこそ有けれと今そ心うる

三 一も寝ずまもりまらせて

誰もいもねすまもりまいらせたれば御けしきいとくるしけに
て御あしをうちかけて仰らる、やう我はかりの人のけふあすし
なむとするをかくめも見たてぬやうあらんやいか、みるとは

せ給ふきくこ、ちた、むせかへりて御いらへもせられすたへか
たけにまもりるるけはひのしるきにやとひやませ給ひて大武三
位長押なけしのもとに侍らひ給ふを見つけおはしてをのれはゆ、し
くたゆみたる物かな我はけふあすしなんすればしらぬかとおほ
せらるればいかてたゆみ侍らはんするそたゆみ侍らねはちから
のおよひ侍らふ事に侍らはこそと申さるれば何か今たゆみたる
そいま心みんとおほせられていみしうくるしけにおはしたりけ
れはかた時御かたはらはなれ参らせすた、我めのとなとのやう
にそひふしまいらせてなくあないみしかくはかなくならせ給
なむゆ、しきこそありかたくつかふまつりよかりつる御心のめ
てたきなとおもひつ、けられてめも心にかなふ物なりければ露
もねられすまもりまいらせてほとさへたへかたく暑きころにて
御さうし障子とふさせ給へるとにつめられてよりそひ参らせてねい
らせ給へる御かほをまもらへ参らせてなくより外の事そなき
とかう何しになれつかふまつりけんとかやくやく覚ゆ参りし夜よ
りけふまでの事おもひつ、くる心ちた、をしはかるへしこはい
かにしつる事そとかなしおとろかせ給へる御まみなと日ころの
ふるま、によはけに見えさせ給ふ御とのこもりぬる御けしきな
れと我はた、まもりまいらせておとろかせ給ふらんみな寝入
てとおほしめせは物おそろしくそおほしめすありつる同しさま
にて有けるとも御らんせられむと思ひて見参らすれば御目よは
けにて御らんしあはせていかにかくは寝ぬそと仰らるれば御覧
ししるなめりと思ふもたへかたくあはれにて三位の御もとより

さきくの御心地のおりも御かたはらに常にさふらふ人の見ま
いらするかよきによく見まいらせよおりあしき心地をやみてま
いらぬかわひしきなりと申せとえそつ、けやらぬせめてくるし
くおほゆるにかくして心みんやすまりやすると仰られて枕かみ
なるしるしのはこを御むねの上にかせ給ひたればまことに
いかにた、させ給ふらんとみゆるまで御むねのゆる、さまそこ
とのほかに見えさせ給ふ御いきもたえくなるさまにて聞ゆかほ
もみくるしからむとおもへとかくおとろかせ給へるおりにたに
物まいらせ心見んとて顔に手をまきはしなから御枕かみにを
きたる御かゆやひるなとをもしやとく、めまいらすれば少しめ
し又おほとこのこもりぬ

四 いと弱げにのみならせたまへは

あけかたに成ぬるに鐘の音聞ゆあけなんとするにやとおもふに
いとうれしくやうくからすの聲なと聞ゆ朝きよめの音なときく
に明はてぬと聞ゆればよし例の人たちおとろきあはれなはかは
りてすこしねいらむとおもふに御格子参りおほとなふらまかて
なとすればやすまんとおもひてひとへを引かつくを御覧して引の
けさせたまへは猶なねそとおもはせ給ふなめりとおもへはおき
あかりぬおほい殿の三位ひるは御まへをはたはからむ休ませ給
へとあれはおりぬ待つて我もつよくこそあつかひまいらせ
給はめといふ中かくいふからにたへかたき心地そする月のふ

五 中宮のぼらせたまひて

るま、にいとよはけにのみならせ給へは此度はさなめりと見ま
 いらするかなしきた、おもひやるへしをと、長治一しの御心地のやう
 にあつかひやめまいらせたらん何心地しなんとそ覚ゆる又人の
 ほらせ給へとよひにきたれば参りぬ物まいらせ心みんとて成けり
 大式三位御うしろにいたき参らせてものまいらせよとあれはち
 いさき御はんいた、露はかりをきあからせ給へるをみまいらす
 れは今日などはいみしうくるしけによにならせ給ひたるとみゆ
 殿のうしろのかたよりまいらせたまひけるも例のやうになとし
 て参らせ給ふこそしるけれ此ころはたれもおりあしければうち
 しめりならひておはしませはいかてかはしるからむおと、くとい
 みもうくるしけにおほしめしなからつけさせたまふ御心のあり
 かたさはいかてか思ひしられさらんかくくるしけなる御心地に
 たゆますつけさせ給ふ御心の哀におもひしられて涙うくをあや
 しけに御覽してはかくしくもめさてふさせ給ひぬれば又そひふ
 し参らせぬかくおはしませは殿もよるひるたゆますまいらせ給
 へはいと、はれにはしたなき心地すれば三位殿もおりにこそし
 たかへかはかりに成にたる事になんてう物は、かりはするとあ
 れはいかかはせんとてすくす大とのちかくまいらせ給へは御ひ
 さたかくなしてかけにかくさせ給へは我もひとへをひきかつて
 ふしてきけは御うらにはとそ申たるかくそ申たる御祈はそれ/
 〳なん始りぬる又十九日よりよき日なれば御佛御修法のへさせ給
 ふと申させ給へはそれまでの御命やはあらんすると仰らるかなし
 させきかねておほゆ

大殿た、せたまひぬれば引かつきたかひとへひきのけてうち
 あふきまいらせなとするほどに宮の御かたより宣旨仰かきにて
 三位などのさふらはる、おりこそまかに御ありさまもき、参
 らすれ大かたの御かへりのみきくなんおほつかなきむかしの御
 ゆかりにはそこをなんおほしう身におほしめす今の御ありさま
 こまかに申させたまへとありたかふみそとはせ給へは何の御
 かたよりと申せはひるつかたのぼらせ給へと仰事あればさかき
 て参らせ給へはひるつかたに成程に道具なとりのけてみな人
 〳〳うちやすめとておりぬされともしめす事もやとおもへは御障
 子のもとに侍らふいかなる事ともをか申させ給ふらむいかてか
 はしらんしはしはかり有て御扇うちならしてめすそれとりてと
 仰らるへき事ありければめして猶障子たて、よと仰らるよくそ
 おりてさふらひけると思ふなを仰らる、事有とみえたり立のく
 みさうしたて、御扇ならさせ給へと申させたまひければ御さう
 しあく事むこになりぬ夕つかたかへらせ給ひぬれば誰も〳参
 りあひぬ御けしきうちつけにやかはりてそみえさせ給ふけふし
 かすこし夜のあけたる心地しておほゆれとおほせらる、きく心
 地のうれしさ何にかはにたる。

六 御前の氷を御覧じて

金櫛 水

御まへにかなまりにひのおほらかに入たるを御らんしてあれ
みれば心ちのさはやかに覚ゆるひのおほきならんひさけに入て
人ともあつめてくはせてみむと仰らるれば女房たちみな立のき
ぬ大殿はかりそさふらはせ給ふ大弐三位大殿の三位殿くして夜
のおと、に入て戸口に御き帳たて、ほころひよりみれば大殿な
けしのもとに侍らせ給ひてみすきのもとになか／＼と左衛門督源
國信 雅實 頼道 中納言大臣殿の權中納言宰相能俊 重資中将左大弁なとめし入て大臣殿ひ
とりて各にたふ我もせんと覚したるもてはやさんとなめりとみ
えてひとつとり給ひぬみきちやうのうちなる人かやうにて一と
せのやうにやませ給へかしいかはかり嬉しからんと思ふ

七 加持参らせたまひて

くれはてぬれば人、おほとなふらなと参らす程にいみしう
くるしけに覚しめされたれば殿たちいそぎ参らせ給ふてそうよ
僧正なとめしきはく参り給へれば御凡帳たて、われらはすへり
のきてきは加持参り給ふ経よみなとすれけふやしつまらせ給
ひておほとこのもらせ給ふけしきなりかくいふは十五日の事と
そおほゆるかやうにてこよひもあけぬれとなよはけにみえさ
せ給ふけふもくれぬ十七日の暁に大弐三位あからさまにまかて
、此むねのたへかたくおほゆれば湯すこし心みて立かへり参ら
むとて出給ひぬくる、とひとしく参りたまひてうち見まいらせ
てあないみしひる見参らせさりつるほどにはれさせ給ひにけり

なといひあはせらる、を聞かせ給ふて何事いふそと仰らるれ
はひるの程にはれさせおはしましにけることを申さふらうやと
申さるれば今は耳もはか／＼しく聞こえずと仰られていと、よは
けに見えさせ給ふしははかりありて此度はさるへきたひと覚
ゆるそとおほせらるればつ、ましけれとなときはおほしめすそ
と申せは僧正のさしもかしらよりくろけふりを立ていのれと
そのしるしと覚て心ちのやすますまざる心地のすれはと仰ら
る、をきくは何にかはにたる明ぬれはおほいとのみひり給ひて
院の御使にて事ともありけなるけしきなれば心なきこ、ちじぬへ
ければ寝たり何事にかこまやかに申させ給ふ御位ゆつりの事に
やとそ心えらる、申はて、ふしたる所にさしよりて御かたはら
に参らせ給へといひかけて立たまひぬ

八 御もののけあらはれて

きのふより山のくちうさとも召たれば十二人の供従者まいり
て加持まいりの、しるさまいとおひた、しめておほしめし
たるかたのなきにや大臣殿をめし院に申せ一年の心地にもさも
と仰られし行尊めしたへと申させ給へればやかてすなはち参
りたればやかて枕かみちかくめしていのらせ給ふ三井寺のひ
と／＼は千年経をたもちたればそれをそいとたふとくよまる、
御惱消除して寿命長からむとゆる、かにすせらる、きくそたのも
しき心地するかやうにいみしき人たちあまたさふらひて我もを

とらしといのり参らせらる、けにや御物のけあらはれてりう僧
正類案らいかうなど名のりの、しる人あらはれさせ給ふて一とせの
行幸の後又見まいらせはやとゆかしくおもひ参らするにそのと
くなければおとろかしまひらするそといふをきかせ給ひていか
にも此二三年例さまに覚ゆる事のあらはこそ行幸もあらめちか
きほとたになし此こ、ちやみたらはこそは年の内にもあらめと
仰らる、ほとよりくるしけにならせ給ひにたり

九 ふたたび中宮御参内ありて

例の御かたより人つかはしたりさる心なとなき人ときけとせ
めて思ひやる方のなければいふなりこなたへた、今のほりまい
りなんや道などそふたかりてかたはらいたくおほしめせとおほせ
られたれはいかてかは参らしと申さん承りぬと申たれはさらは
今の程にと仰られたれは参ぬはなれぬ人なれば宣旨をそあそ
はさせ給ひて御心地のありさまとはせ給ふ文まいらすま、に申さ
んとおひた、しく申ちらしけりなともれ聞えてあしき事もやな
と覚ゆればさもえ申さす又わざと召てとはせ給ふに申さ、らんも
あしかりぬへければた、のほりて見参らせ給へさはいみしうく
るしけにみえさせ給ふと申せはさはもしやとほりよからんひま
にと申てとくかへしつかはしつ参りてみれば殿や大臣殿院より
戒うけさせ給ふへきなりと奏させ給ふけりてとせんせい法印
めすへきさせられその御もうけともせらる、程なりけりかや

うの後ならば夜も明ぬへければ宮の御かたよりめしつれば参り
たりつればかうくこそ仰られつれと申道の所せはきそとよ
はけに仰らる、くるしけに覚しめしたり殿にものほりてみせま
いらせはやと申させ給ひければ今の程宮のほらせ参らせん物さ
はかしからぬさまにと思ふにのほらせ給ひぬれば御かたはらに
人のなきかあしきそとさせられてそのよしを申されけるなめ
りかへり参らせ給ひてた、すけはかりは侍らへと仰らる、さて
三位殿おはして殿たち皆障子の外に出させたまひぬなけしのき
はに四尺の御凡帳立らせたり御枕かみにおほとなふらちかく参
らせてあかくとありけるにそひふし参らせたりはしたなき心
地すれとえのかす宮のほらせたまひたれとあない申せはいつら
いつなと仰らる、は無下に御耳もきかせ給はぬにやとおもふに
心うく覚ゆその御凡帳のもとにと申せはいつらと御凡帳のつま
を引あけさせ給へはこ、にと申させ給ふ物なと申させたまはん
とそおほしめすらんと思へは御跡の方にすへりおりぬちかひて
なけしのうへに宮のほらせ給ひしははかり何事にか申させ給
ふ殿の御聲にて久しくこそ戒ぬれ御かゆなとはや参らせんやと
仰らる、に宮きかせ給ひて今はさは帰りなんあすの夜もと仰ら
れてかへらせ給ひぬ

一〇 御戒うけさせまゐらせて

例のかたはらにまいりて氷なと参らす殿たちまいらせ給ふて

今は法印めし入よとてふたまなるけいなど参らせ戒のさたせ
させたまふ法印まいらせ給ひぬれはみき丁はかりへたて、御なを
しとりてまいれと仰らるれば取て参りたり御手水まいらすへけ
れとおきあからせ給ふへきやうなれば紙をぬらして御手など
のこはせ参らせなとする程そかなしき御かうふりなど持てまい
りたればするかせぬかのほとにをし入て御なをし引かけて参ら
せたる御ひもき、むとおほしめしたるなめりさ、んとせさせ給
へと御手もはれにたれはえさ、せ給はぬみる心ちそ目もくれ
はか／＼しう見えぬかね打ならして事のおもむき申あきらめ給
ふ十戒を先の世にうけさせ給ひてやふらせ給はさりければこそ
此世にて十善の位なかくたもち佛法をあかめ一切衆生をあはれ
みさせ給ふ心いまたむかしより今に至るまでかはかりの帝王お
はしまさすいと、こよひの御戒のしるしにすみやかに御惱消除
せうさんして百年の御命なかくたもたしめ給へと申さる、きく
にた、今やませたまひぬるときこえてめてたきさて御戒うけさ
せまいらすれはいとよくたもつ／＼と仰らる、殿たちたもつと
仰らる、やと申させ給へはうなつかせ給ふ

一一 法華経を誦せらるる

うけさせまいらせはて、法印出させたまへは故右大臣頼房の子に
ちやうかいあさりといふ人のもとよりさふらはる、御枕かみに
ちかくめしよせ仰らる、やう経すしてきかせよちやうかいが聲

きかむもこよひはかりこそきかめと仰られていみしうくるしけ
におほしめされたれと御涙もえ出すそれを聞人心地たれかはな
のめなる心ちせんたれもたへかたき心地するあさりや、もい
らへなし経の聲も聞えぬはあれもためらる、なめりと聞ゆし
はしはかりありてすこし出されたるをきけば方便品の比丘傷に
か、るほどの長行をそよまる、つく／＼ときかせ給ふて衆中之
糟糖佛威徳故去といふ所より御聲うちつけさせたまひて露はか
りかほとと、こほろ所なくゆふ／＼とよませたまふ御聲たふと
きあさりの御聲をしかたれてきこゆあさりもとわりわきてそこを
しもよみきかせ参らせらる明暮一二の巻をうかめさせ給ふとき
、をき給へる事なればなめり

一一 一むけにおもくおはしまして

か、る程に三位のもとよりむけにおもくおはしますよし聞て
女房おこせてこまかの事きくに威にけりいませ給ふともまいり
てつほねなからもき、まいらせんよそにてしからせ給ふのほら
せ給へといへはやかてくしてまいりぬみれば大式三位うしろの
かたいたきまいらせて大殿の三位有つるま、にそひふし参らせ
られたり御跡のかたに居たれば大式三位くるしうせさせ給
へは申つるそそのあしとらへまいらせ給へとあれはとらへま
いらせ給たり御あせのこひなとせさせたまふ大殿の三位かくし
つまらせ給へる程にせまほしき事のありしてまいらんとてまい

らせ給へとあれはそひふしまいらせぬしはしかり有て例のちやうかいあさり御几帳のそはにめし入て観音品読てきかせよと仰られるれはいとたふとくよみ給ふいかに覚しめすにか偈をよめと仰らる、おほしめすやうあるなめりと心えかたし大臣殿の三位帰り参られたれは御足うちかけて御手をくひに打かけさせたまへはえはたらかねは三位殿我るたるやうに御跡のかたにさふらはる例の氷なと参らせ御あせなどのこへとおほせられは御枕かみなるみちのくに紙して御ひんのわたりなどのこひ参らす程にいみしく々るしくこそなかるれ我は死なんする成けりと仰られて南無阿弥陀佛とそ仰らる、をきくにた、におはしますおりにかやうの事は□□の下人までいまくしき事にこそいふを御口よりさはくおほせられ出すときくは夢かなとまであさましければ涙もせきあへず殿御かほにあて、佛を念せさせ給へか、せ給ふとき、まいらせし御筆の大般若はいつこにかおはしますそそれをよく念しまいらせ給へと申給へはふたまにこそあらめと仰らるれば殿聞てとりてまいらせ給ふ是にやなとみせまいらせ給へはこれなりと仰らる、なをくるしうこそ成増るなれとてた、せきあけにせきあけさせ給御けしきにてた、今しなんするなりけり大神宮たすけさせ給へ南無平等大会講明法華なと誠にたふとき事とも仰られつ、くるしうたへかたく覚ゆるいたきおこせと仰らるればおきあかりていたきおこし参らすに日ころはかやうにおこしまいらするにいと所せく、いたきにておほえさせ給へるなりけりいとやすらかにおこされさせ給

ひぬ大式三位御うしろに居給ひたり御せなかをよせかけまいらせて御手をとらへまいらせなとする御かひなひややかにさくられさせたまふかはかりあつきころかくさくられ給ふはとあやしあさましたとへんかたなし

一一三 崩御あそはさる

僧正めし十二人の供従者めしよせて大かた物も聞えず成にたり大臣殿の三位御口に手をぬらしてぬりなとし参らせ給ふ念佛いみしく申させ給ふさまこそ殊外なれともすれば太神宮たすけさせ給へと申させ給ふも其しるしなく無下に御目なとかはり行僧正とみに参らせ給はすや、ひさしく有て参らせ給へれば日ころへたつれと何の物おほえんにか物のはつかしとも覚えむた、ひとつにまとはれて僧正三位殿二人御前我身五人のひとくひとつにまとはれあひたり聲をおしますかしらより誠くろけふり立はかりめも見あけす念し入て佛をうらみくとき申さる、さまいとたのもし例ならぬおりはあやしの僧たにも物いのるはたのもしくこそなるこ、ちすれかはかりの人の一心に心に入て年ころ仏につかうまつりて六十餘年になりぬるにまたされとも佛法つきすすみやかにこの御目直させ給へと人なとをいふやうにをそしくとあれと何のしるしもなくて御口のかきりなん念佛申させ給へるもはたらかせ給はすならせ給ひぬ殿御覽ししりて今はさは院に案内申さむと申させたまへは民部卿後明こなたにめし

て殿みすをしあげ物忍ひやかにいかに仰らるゝにか仰らるればた
、れぬ大臣殿よりて今は何のかひなしとて御枕なをしていたき
ふさせ参らせつ殿たちみなた、せ給ひぬ僧正なを御かたはらに
そひる給ひて何の事にかしのひやかにつふくゝと申きかせ給ふ
か、るほどに日はなくとさし出たり日のたくるま、に御色の
月ころよりもしくはれさせ給へる御かほの清らかにて御ひん
のあたりなと御けつりくししたらむやうにみえてた、おほと
こもりたるやうにたかふ事なし

一四 人びといみじうなきかなしみて

僧正今とは見はて奉りてやをら立て御かたはらの御障子を忍
ひやかに引あけて出給ふに大弐三位あなかなしやいかにしなし
出させ給ひぬるとたすけさせ給へと聲もおしますなき給ふを聞
てさなからなきとよみあひたり左衛門督中納言大臣殿の権中納
言中将の御めの子の君たち十餘人女房のさふらふかきり聲を
と、のへてせめておほゆるま、に御障子を展なるなどのやうにか
はくゝとひきならしてなきあひたるおひた、しき物おちせん人
はきくへくもなし今一度見まいらせんとてしたしき上達部殿上
人我もく参れとうときはよひもいれす大弐三位おほとこのこも
りたるやうなる人を我きみやいかにして方々をはすておはしま
しぬるそむまれさせたまひしよりかた時はなれまいらせすあや
しのきぬの中よりおほ青しまいらせていつれの行幸にもはなれず

しりにたちさきにたち病の心ならぬさとる十日はかりするにも
恋しく床しくおもひまいらせつるにかた時見まいらせていかて
かさふらはんた、くしておはしましね今一度おとろかせたまひ
て見えさせ給へあなかなしやこひしきをいかにしてか侍らはん
た、めしてそと御手をとらへてをめきさけひ給ふきくそたへか
たきこの聲を聞てそこらの、しりつるくしうさともひしとやみ
ぬ山の座主仁源今そまいりて僧正の出たまひぬる障子引あげ給へは
三位山の座主仁源も今は何にせんするそといひつ、けてなき給ふ御
さうしよりなけ入らる、物を何そとみれば我局に置たる二ある
のからきぬかつきたるものなけ入て人のゐるをみれば藤三位殿
のかくときつて参り給へるなりけりあな心うや例さまにうち見
あげ給ひつらんを今一度見まいらせす成ぬるこ、ろうきを何
のものいみをしてよひ給はさりつるそ年ころの御病をたにはつ
る、事なくあつかひ参らせて限の度しもかくこ、地をやみてけ
る身のすくせの心うき事といひつ、けてなき給ふ我は御あせを
のこひまいらせつるみちのくにかみを顔にをしあて、そへるら
れたるあの人たちおもひ参らせらるらむにもとらすおもひま
らすと年ころは思ひつれと猶をとりけるにやあれらのやうに聲
たてられぬはとそおもひしらる、大臣殿参らせ給ひてうちみま
いらせていかにおほしとくにか持たまへる扇の骨をた、みなか
らはらくとうちすりてなきで出給ひぬと思う程に今は御かう格
し参れとありけるにやとみえてすなはちしたしき殿上人なめり
源中納言の四位少将あきくに右大臣殿顯國の加賀介家さたあかあか

と日のさし入てあかきにはらくとおろしていぬあなあさまし
こはいかにしつるよとえさらぬ心にまかせぬ日のくる、たにお
ほとなふらをとくさし出よかしとまたおろさぬ先に心もとなく
おほえしものをはなくとさし出たる日におろしこめてわざと
くらくなすよと覚ゆるに物そおほえぬ藤三位あないみしかくは
いかにおろしつるそやかひなき御かほなからもあかりて守り参
らせてあらんとこそおもひつれと聲もおしますなき給ふ大臣殿
またまいりて御そ今はぬきかへさせ参らせて御た、み今はうす
くなさんとえもいひやり給はすの給ふて御ひとへ取よせ給ふて
ひきかつけまいらせなとせられぬなけしの下にまかりいてさせ
給ひぬと見まいらすま、に大臣殿の三位まろひおりてやかて
そこにおなしさまにていきも絶たるさましてふし給ひたる大臣
殿見給て子の中納言頼通めしてあれてのけよとあれは其方の女房中
納言としていとたのもしくめてたけにてかきいたきていぬさる
ほとに大式三位も御子播磨守出雲守などいふ人々かきすく援ひて
ゐていぬ藤三位殿は例ならぬよはけにみえつる人のなけ入られ
つるよりとらて、こゑたにもせずいひつ、けてなき給ふさまこ
とはりとみゆれとすきいらぬるにやと見ゆれば子の加賀守を
見おこせてそれいたきのけたてまつらせ給へといよはけにみ
えさせ給ふさまをは物の覚え侍らぬそたすけたまへとあれ
といふかひなしにもおりさせ給へとひきのくれと何事の給ふ
そうるはしくておはしましたつる御顔を今一度見せさせ給はすな
りぬるはうらめしさはいふかたなしとあちきなく人のつみのや

うにうらみなきたまふもことほりにそ聞ゆる御かひなをさくれ
はいまたひえなから例の人のやうにたをやかにさくらるれば心
みかてらしはしもさらはたかへ参らせて物の給へかしくおもへ
はいたくもす、めてもるともに御かひなをとらへて居たれはい
つの程にかはるにかた、すくみはてさせ給ひぬ今はかひなしと
おもひていさせ給へさふらはせ給ふとも今はかひなし一言も
こそもしやとおもひつるほとこそ有つれと引のくれと大かた取
つき参らせていかて一所をきまいらせていかむするそとの給ふ
加賀守のさばかりあるはいたきのくへき心ちもせねは加賀守に
我はえいたき給ふましくは局の人をよひ給へといへはさはかりの
物もおほえすけなる人のとりあへすいかて我君のおはします所
にけす下衆をはよせんとていみしうなかる参りさまにいたかれたり
つればせめて物のおほえてかとおほゆるされは我方の女房と
もよひよせてひたうに引のするやうに人のせなかにおほせてや
りつ御めのとたちた、れぬれば因幡内侍とて明暮あまたの内侍
の中にとりわきつかうまつりつきたりし人とふたり御かたはら
にむこにちかくさふらふあはれおほく侍らひつれと契ふかくもつ
かうまつりはてさせ給へるなどいひつ、けていみしうなかる、
さまそいと、もよほさる、心地してたへかたきつほねよりいそ
きたるけしきにてきとおはしませ三位殿たえ入せ給ひぬといひ
て引さけてゐていぬ誠になき人のやうにて大かたいきもせず暮
か、る程にあつまりてかきのせてゐていぬ御まへのかたかいたす
みていつの間にかはるにか日ころおひた、しく物も聞えずの、

しりつるけしきともしめくと火をうちけちたるとは是をいふへきにやとおほえて音もせず大弐三位の局かへをひとえたてたるなくけはひともして昼の聲どものやうに泣あひたる中に三位の御聲にて哀かやうに日のくるゝに御かうしとくまいれかしと心もとなくおほえしにいふへき事もなくしなしまいらせつるはいかにしつる事そや是たすけよやた、おはしますらん所へ我をめせやをひをひとくときたて、なかるゝをとすきくそいと、たへかたき

一五 神璽宝剣のわたらせたまふとて

日の御座のかたにこほくと物とりはなす音して人々のこゑあまたすなり何事にかときく程におまへよりおなし局に我かたさまにてさふらひつる人うちきていみしう物もいはずなく見るにいと、其事ときかぬになきふさるゝ心地そするしはしたためらひていふやうあなこゝろうやた、今神璽宝剣のわたらせ給ふとてのしりさふらふそ日の御座の御物具のわたり御帳のひき御か、みなと取いてさふらふ御帳こほつをとなりけりといふにかなしさそたへかたきひるより美濃内侍をやかて殿のはかしにつけさせ給ひつればつき参らせておはしつるやうなとかたる我は朝かれるのおましのことはしらすりつれば此人のかたをき、て何にかはせん

讚岐典侍日記 下

一六 出仕の御沙汰ありて

かくいふ程に十月幕末一に成ぬ弁三位殿より御ふみといへはとり入てみれば年ころ宮つかへさせ給ふさま御心のありかたさなとよくき、をかせ給ひたりしかはにや院白河より社鳥羽このうちにさやうなる人のたいせちなりたうし参るへきよし仰ことあればさる心地せさせ給へとあるみるにそ浅ましくひかめかと思ふまであきられけるおはしまし、おりよりかくは聞えしかといかにも御いらへのなかりしにそさらてもとおほしめすにやそれをいつしかといひかほにまいらむ事あさましき周防内侍後冷泉院七十にをくれ参らせて後三条院七十一より七月七日まいるへきよし仰られたりけるに

後拾 天河おなしなかれと聞なから渡らん事はなをそ悲しき

とよみけんこそけにとおほゆれ故院堀河の御かたみにはゆかしくおもひ参らすれとさし出ん事を有へき事ならずそのかみたち出したにはれとさし思ひあつかひしかとおやたち三位殿などしてせめられん事をとなん思ひていふへき事ならさりしかは心のうちはかりにこそあまのかるもにおもひみたれしかとけにはも我心にはまかせずともいひつへきことなれと又世をおもひす

てつときかせ給は、さまで又大せちにもおほしめさしと思ひ見られて今すこし月ころより物おもひそひぬる心地していかなるついでをとり出んさすかにわれとうきすてんもむかし物語にもかやうにしたる人をは人もうとましの心やなとこそいふぬれ我心にもけふとおほゆる事なればさすがにまめやかにもおもひた、かやうにて心つからよはりゆけかしさらはことつけてもと思ひつ、けられて日ころふるに御めのとちまた六位にて五位にならぬかきりは物まいらせぬ事なり此廿三日六日八日そよき日とくく／＼とあるふみたひく見ゆれとおもひ立へき心地もせず過にし年月たにわたくしの物思ひの後是人などに立まざるへき有さまにもなく見くるしくやせおとろへにしかはいかにせましとのみおもひあつかわれしかと御心のなつかしさに人たちなどの御心も三位のさて物し給へはその御心にたかはしとかやはかなき事につけてもようるせられてのみ過しに今さらに立出て見し世のやうにあらん事もかたし君鳥羽はいはけなくおはしますさてならひにし物そとおほしめす事もあらしきらんま、にはむかしのみ恋しくてうらみむ人はよしとやはあらんなどおもひつ、くるに袖のひまなくぬるればかわか間もなき黒染めの袂かな哀むかしかたみと思ふにかやうにてのみ明くる、にかく里に心のことかなる事かたし五六日なれば内侍のもとより人なし参れといふふみのこしなとおもひつ、けられて過す程に御即位など世にのしりあひたり大納言のめのととはりあけし給ふへしとて安芸の前司の三位殿こそ故院の御ときとはりあけはせさせ給ひければそ

の例をまねはんたとたつねらる、ときくほどに大納言日ころ例ならて俄におもりてうせ給ひてときこゆいとこ、ろほそき世かなと思ひかこちぬ夕暮に三位殿のもとよりとはりあけすへきよしあれはいとあさましくて日ころはき、すくしてのみ過つるをまいらしとおもふなめりと心得させ給ふてをしあてさせ給ふなめりとおもふにすへきかたなしたのみたるま、に例の人よひてかうく／＼なん院より仰られたるをいか、はせむするといへはいか、せさせ給はむせ中わつらはしく侍らふめりた、とく思しめしたつへきなめりまいらしとさふらは、我為にこそよしなき事出まうてこめ我君さるへきとおほしめさせ給ふへきになとさたしあひたる程にくらのかうの殿より人参らせたり院宣にて撰政殿の承りたて侍ふ堀河院の御そふく賜りたらはとくぬくへきなりと宣旨くたりぬとくぬかせ給へといひにをこせたりかはかりの事たに心にまかせすたうりにぬくへきおりもまたすぬきてん事心うきにせりつみしといひけんふることを身に思ひよそへらる、かくさたするを聞てせうとなる人あはれ男の身にてかくいはれ参らせはやうら山しくもおほえさせ給ふかな女の御身にてさらても有なん故院の御時に年ころの人たち御めのとこたちなとのたまはりあはれしそふくを何はかりの年ころさふらはせ給はさりしかと給はらせ給ふ今の御時に又なを大せちにいるへき人にて月もまたすぬけと宣旨くたるもあやしなといひつ、くるを聞程にあちきなくはつかし花山院のおりにこれしけの弁を入道殿一条院にわたりてもとのことくろくきにてつかはんと仰ら

れたるをたに我君につかうまつりし事のそれにつけても思ひ出
られぬるへければつかさ位をすて、法師に成にけん我身の何の
思ひ出にていにしへのはつかしきにおもひこりすきしいつへき
あまたの女房の中になど我しも二代までかくはあるまじきめを
みるへからんとおもふに先の世の契も心うけれどとさるへきにこ
そはと思ひなして流の水をむすひさやかになりしたしくなれつ
かうまつるしうとならせ給へはおほろけならぬ契にこそとおも
ひなくさむれと藻に住むしのわれからとのみ世にありてかゝる
めも見ることかなしけれどさてあるへき事たらねはいそき立ぬ
しもの人などは年ころも、しきの中にあそひならひたる心ちに
つくくとおもひたえたり里るは口おしう思ひけるにかゝる事
出きたるを嬉しうおもひたるけしきにて心ちよけにおもひける
を見るはつれなくうらめしきに霜月にも成ぬ

一七 御月忌に参りて

一九日に例の参らんと思ふに雪よるよりたかくつもりてこち
たくふるいそかしきといく程なく残りすくなく成にたれば大か
たの人も夜をひるになして物もきこえぬまでいそくめれば我は
この日ならんからにいそかしとてまいらさらむか口おしきに出
たつをひとりうけ引人なしさはかりいそかくしちらさせ給ふ
てよかしけふまいらせ給ひたらんに院も大臣殿もよにいみしと
もあらし参らせ給はずともあしき事もあらしかはかり雪は道も

雅實

みえず降り我御身こそ車のうちなれば扱もおはしまさぬ御供
の人はいかてかたえむするそなとわひあひてと、めつれと人た
ちによしと思はれむとてまいる事ならはこそあらめ此月ならむ
からにいそかしとてかくへき事かはいさましく嬉しきいそきに
てあらんたにそれにさはるへき事かは我をすこしも哀とおもは
ん人はけふと参らせよといふまゝにけしきもかはるかするきに
やいはれぬる人ともさはかり思しめしたらむ事さまたけ参らす
へき事ならず車よせよ供の人よはせなとする程に例はしまるほ
と、おもふほとやうく日たくるにまいらてやみなんするな
めりとおもふ口おしくわりなき人ともきぬればとくくといへ
は嬉しくてのりぬ道のほとまことにたへかけに雪ふる車のうち
にふりいりて雑色うしかひみなかしらしらく成にたりうしのせ
なかもしろきうしに成にたり二条の大路には大宮のみちもなき
までふる参りたれば人々あないみし例よりも日かけつればけふ
はえまいらせ給はぬなめりことほりそかしいそかくおはしつ
らんと申あひたりけるにおほろけならぬ御心さしかなけふはと
あはれかりあひたり十一月もはかなく過ぬ

一八 御即位に帳褰げをつとめて

十二月朔月また夜をこめて太極殿にまいりぬ西の陣に車よせ
てえんたうしきて入へき所としてしつらひたるに参りぬほのく

菴道

と明はなる、ほとにかわらやとものむねかすみわたりてあるを見るにむかしうちへまいりしに過ぎまに見えし程なと思ひ出られてつく／＼と詠るに北の門より長ひつ權にはやきたるものとすはうのこきうたるくはうこぐの出しきぬ入てもてつ、きたるへち別にもおもしろく見ゆへき事ならねと所からにやめてたし人とも見さはきいみしく心ことに思ひあひたるけしきともにて見さはけとも我た、イは何事にも目もた、すのみおほえて南のかたをみればれいのやたから八咫鳥す見もしらぬものとも大かしらなとたてわたしたる見るも夢のこ、ちそするかやうのことは世継なとみるにもその事か、れたる所はいかにそやおほえてひきこそかへされしかうつ、にけさ／＼と見る心地た、をしはかるへし日たかくなる程に行幸なりぬとての、しりあひたり殿原里人など玉のかうふりしあるは錦のうちかけ近衛つかさなとよろひとかやいふ物着たりしこそみもならわすもろこしのかたきたるさうしの日の座にたちたるみる心地よとあはれにかくて事成ぬおそし／＼とて衛門の佐いとおひた、しけにひさ長紗門もんなどをみる心ちして我にもあらぬ心地しなからのほりしこそ我ながら目くれて覚えしか手をかけさするまねしてかみあげよりてはりさしつ我身いてすともありぬへかりける事のさまかななどかくしをきたる事にかとおほゆ御前のいとうつくしけにしたてられて御もやのうちなるさせ給ひたりけるを見参らすもむねつふれてそおほゆる大かた目もみえずはちかましきのみ世に心かくおほゆればはか／＼しくみえさせ給はず事はてぬればもとの所にす

へり入ぬ夜に入てそかへりぬるあるかなきかにて帰りたればかほをあやしけにおもひてまもりあひて御顔の色のたかひておはしますはいかになといひあへるはまたなをらぬにこそとしほしほとなかれぬる

一九 ついたちの日に仕出

しはずも漸つこもりに成て辨のすけ殿の文といへはとり入てみれば院より三位殿大納言のすけなとさふらはぬ朔日のさやうのおりはさるへき人あまた侍らふこそよけれ参るへきよし仰られたるとそあるいか、せんとて参らんとそいそきたつ朔日の日の夕さりそ参りつきて陣いる、よりむかし思ひ出られてかきそくらさる、つほねにいきつきてみればこと所に渡らせ給ひたるこ、ちして其夜は何となくてあけぬつとめておきてみれば雪いみしく降たり今もうちちる御まへを見ればへちにたかひたる事なき心地しておはしますらん有さまこと／＼に思ひにされていたる程にふれ／＼こゆ粉きといはけなき御気はひにて仰らる、聞ゆるこはたそたか子にかと思ふほとに誠にさそかしおもふに浅ましく是をしようとうちたのみ参らせてさふらはんするかとたのもしけなきそ哀なるひるははしたなき心地してくれてそのほることよひなきに物まいらせそめよといひにきたればおまへのおほとなふらくららかにしなしてこちとあれはすへり出てまいらするむかしにたかはず御基たいのいとくろらかなるこきなくてかは

らけにてあるそ見ならばぬ心ちすはしりおはしましてかほのもとにさし上りてたれそこはと仰らるれば人々堀河院の御めのごそかしと申せはまこと、覺したりことの外に見まいらせし程よりはおとなしくならせ給ひにけりとみゆをと、し的事そかし参らせたまひてこきてんにおはしまいに此御方にわたらせ給ひしかはしはかり有て今はさは帰らせ給ひね日のくれぬさきにかしらけつらんとそ、のかし参らせ給ひしかは今しはさきふらは、やと仰られたりしそいみしうおかしけに思ひ参らせ給へりしなど只今の心地してかきくらすこ、ちすそのよも御かたはらにさふらひたれはいといはけなけに御そちかにふさせ給へる見るそあはれなる

二〇 摂政殿参らせたまひて

明ぬれはみなひとくおきなとしてみれば御まへのみすいとおひた、しけなるあし声とかいふ物かけられたりへりはひ色なり御さうしの御きちやうおなし色の御几帳の手しろきなり御けつりくしの大床子もなしか、るおりにはなきにやおさなくおはしませはかとそ物など参らすれうけくにしてめすそ哀なるひるつくて殿参らせ給ひて人々るなをりなとすれば物をまいらせさしてた、んもおとなにおはしまいにそさやうのおりもわかず立しか又おとなしくなともつけさせ給ひしか是はうちすて、た、はよき事やいはれんとすると思へはなをるたるもかくこそ

ありかたかりける事を心にまかせてすくしけん年月をいかて思ひしらさらんはしたなく思へはうちうつぶしてゐたれば御さうしの外にゐたる人たちにあれはたそと、はせ給ふ御声聞ゆそれといらふるなめり御さうしの内にちかやかについていつよりさふらはせ給ふそ今よりはかよふにてこそはそもむかしの思ひ出られ給ひてこひしきにそのかみの物語りしてなくさめんなとあるいとかなし我も人もおなしやうにてこそ物せさせ給ふめればかなりし世にはいせん暗誰そととひてそれかしときかせ給ふては御したさし出させ給ひてさしぬきたかく引あけてにけさせたまふとて人々わらひ興しまいらせしひと所の御けむはいにて有けると思ふに何の御かへりは申さん物申されねは思ひかけさりし事外かやうにちかやかにまいりて物など申しこと、はおもはさりしかな例ならておはしましおりなと御かたはらにそひふさせ給へりしおりにまいりたりしかは御ひさ高くなさせ給ひて陰にかくさせ給ひしおりかやうならん事ともこそおもはさりしかけにもかくれさせ給ひしかな世はかくもありけるかなといひかけて立せ給ひぬる聞そけにと心うきかやうにてはえなき朔にて過ぬ人たちのきぬの色とも思ひくうすらきたり

二二 法華経に花奉りたまふとて

正月になりぬれば此月ならんからにかくして参りて堀河院に参りたれば人々いかて参り給へるその内にと聞まいらせつるはこの月はよもとおもひ参らせしといひあはれたりいかてかまいらざらむつかうまつりはてんと思へはいみしういそかしかりしにたにも参りしをといへは誠にかくか、す参らせ給ふ事のありかたきなどいひあひつ、つれ／＼のなくきめに法花経に花たてまつり給ふにとていとなみあはれたるそいと哀にみゆる

一一一 わたくしの忌日にわたりあひて

二月になりてわたくしのきにちにわたりあひたり講きくさうしのもとにてみればひと、せの正月にすしやうをこなうとて内にさふらひしをむかひにをこせられたりしかはおもしろき所なるに我とくしておはしませとて大夫のすけや内侍なとくしておはしたりしに此さうしのもとにゐるおとなひをき、ておはしましにけりなたれ／＼くしてすいへは内侍殿にあひ参らせんいとうれしき事かなといひてあはれたり此御まへおほしあつかふるさまのこの外にくなけに悦もえ申させす今はこもりゐたる身にてまかりありきなともかしらつきのみくるしう成たるみればさと殿などへもえ参らすさらてのけさうはえなけさしは此月にとけてやまかりかくれんすらむとしうに成ぬへき心ちのしつるにこよひは私の御しるしとおほえていみしうなん嬉しきは今に心やすくよしあきらめつれば後の世もやすくとありし間しにかさ

まにておほすらんと有しかまつおもひ出らるかくて二月も過ぬ

一二三 月忌、三十講に参りて

三月に成ぬれば例の月に参りければ堀河院の花いとおもしろくかねかた三条院におくれまいらせて

後拾
いにしへに色も替らす咲にけり花こそ物は思はさりけれ

とよみけんけにとおほへて花はまことに色もかはらぬけしきなりむかしの清涼殿をは御堂になさせ給ひて七月迄は霄暁のれい例時したえす共人のくらうとまち左近の陣なと僧坊になりたり内裏にてありし所ともさひしけなるみるにもうせさせ給へりけん院の中のひきかへかいすみさひしけなる御覧して

かけたにもとまらさりける草のうへを玉臺と誰かいひけん
とよませ給ひけんけにとそおほゆる宮の御方に三十講を行はせ給ふ見て法華経を日に一品つ、講せさせ給ふそれきくに三位殿のまいらせ給ふにくして参りて講などはて、御まへちかく三位殿をめせはさふらはる宰相とてさふらはる人三位殿は今すこしちかくまいらせ給へすけ殿は今のはつかしといふをきかせ給ひてそれしもこそ心さし見ゆる見たてなくおもひ出もなけに見ゆ

る所をわすれずみゆると仰られもはてすむせ帰らせ給へる者の
きこゆるに我もたへかたし暮ぬれはまかてぬつこもりに内へ参
りぬ

二四 衣かへ灌仏会になりて

四月の衣かへにも女官とも例の事なれば我もくど身のならん
やうもしらす几帳ともとりあへる人見あへれと我はみなほしか
らすこれをおかしておほしめしたりしかおもひ出られて灌仏の
日になりぬれば我もくどとり出されたり事はしまりぬれば日
の御座の御まへのみすおろして人々出てみる殿をはしめまいら
せてひろひさしの高欄に例のさほうたかはす下かさねのしりう
ちかけつ、上達部たちゐなはたり御導師事の見さま申てみつか
く山の座主ごしきのわたるむかしにたかはて御たうし水かけて
殿参らせ給ひてかけさせ給へれば次第によりてつきくの上達
部かく何事かはた、ひてみゆる左衛門督中納言よりてかくとて
いとたへかたけに物思ひ出たるけしきなりかほもたかふさまに
みゆるあちきなく我もせきかねられて大かた例はこのかたも見
しとおもひて御几帳ひきよせてみれば御几帳のかみより御覽せ
んとおほしめす御たけのたらねはいたかれて御覽する哀なりお
となにおはしますにはひき直衣なをしにてねんすしてこそ御帳のま
へにおはしまし、か先めたちて中納言にもおとらすおほゆれば
人めもみくるしうておまへことはてぬにおりぬ

二五 五月雨のころとなりて

五月四日夕つかたに成ぬればさう直備ふいとなみあひたるをみれ
はこそこのけふ何事思ひけんさうふのこし朝かれるのつほにかきた
てて殿ことに人々のほりてひまなくふきしこそみつ野、あやめ
も今はつきぬらむとみえしか又の日も空はさみたれたるに軒の
あやめ雫もひまなくみえけるに

五月雨の軒のあやめもつくくど袂にねのみか、る空かな

とのみおほゆやうく十日あまりに成ぬればさい最勝そう講いとな
みあひ参らせてと聞しかははて、の十餘日はかりのつれく物
語にはその日のろんきといひ出しみしきなとさたせさせ給ひ
しおもひ出らる

二六 扇ひきに興しあはれて

六月になりぬあつき所せきにもまつこそこの此頃は事もなく御
心地よけにあそはせ給ひて堀河のいつみ人々みむと有しを何と
おほしめし、にかあなかちにす、めつかはし、かは思し召事な
れば先あすとて我は出て人たち侍しに二車はかりのりつれて日
くらしあそひて帰りしにみれはこよひとまりて心やすき所にて
うちやすまんとおもひてと、まりしをひたち殿といふ女房あな

位殿立て出ぬ の出雲といふ女房の讀て北面のつほに薄にむすひつく

今はとてわかる、秋の夕暮は尾花か末も露けかりけり

とよみたりつれと聞も哀なり

二八 花の袂になりて

よひと思ふに人たちのけしきのくるしくて見えさらむこそ口おしく候へと申し、かはつとめてあくるやをそきとはしめさせ給ひて人たちめしすへて大式三位殿をはしつめてあはれたりしに先ひけと仰られしかはひきしにうつくしとみしをえひきあて、中にわろかりしをひきにてたりしをうへになけ置しかはかゝる心うやあるとてわらはせ給ひたりし事を但馬殿といふ人の家の子の心なるやこと人はえせしなど興しあはれしにそのおりは何ともおほえさりし事さへいかてさはしまいらせけるにかとなめけにけふは有かたく覺せる

二七 別るる秋の夕暮に

七月にもなりぬ御はてとての、しりあふその日に成ぬれはその御法事おなしと百僧なりありさまおなしことなかれはと、めつこそより後女房六人をと、めつ宮の御方にあつかはせ給へるか今はまかてなんする哀に悲なしき事かやうにさふらひつればこそ月などに参らせ給ひしを日たちてはとく其日になれかしとかそへくらされて待参らすれば今はさはみ参らするか心うきとたれもくいひあひて泣ことかきりなしなきあふをはてぬれは三

萬はてぬれは廿五日よの中の諒闇ぬきあはる御まへのしつらひ日ころおひた、しけなりつるみす木丁のかたらひ御さうしなとりはらはれて日ころは夜のおと、の御帳もなかりつれと有しやうに立られなとしてた、いにしへの御しつらひにてたかふ事なくめてたく成にたり殿をはしめて殿上人藏人さうそくかへ糞束糸いおろし女房たちのすかた我もく襦子と色々つくしあはれたるさまそた、おりけん心地してそなみ居られたる水無月ころに引かへてめつらしき心地するさいしもとゆひはしろかりつる例のやうにむらごになされんとていとなみあはれたり殿うるはしくさうそきて参らせ給ふてとくまいらせ給へとめせは参りたれば御前もろともにさうそくせさせまいらせ給ふうつくしけにしたてられひきなをしておはします御しりつくり参らするにもむかしまつ思ひ出たるかやうにみそせさせ参らせて日ことにい石灰しはひの御はいのおりはいか、させ給ひしとまつおもひ出らるくはんし参りたるや時よくなりたりやとくくとと申させ給

ふに我ひとりぬきかへてさふらふへきならぬはぬきかへつ局におりても先きかへんともおほえす是をさへぬきかふるこそ院のかたみとおもひつれこれをさへぬきつれはいと心ほそし一天の人御心さしあるもなきもみなしたりつるにたしくつかうまつりつるさへ一度にぬきてんする思ふによからぬ事なれとぬきかへましき心地するかきり有ことなれはいか、とそぬきつ遍昭僧正の深草の帝にをくれまいらせて法師になりてこそうせけるか又のとし御ふく人々ぬきけるに

みな人は花の袂になりぬなり苔の衣よかはきたにせよ

とよみけん

二九 内裏遷御に御ともして

かくて八月に成ぬれは二十一日御渡りと定りぬひとくいと
なみあひたりされは我はかはらぬ九重のうちの有さまをみんな
はしめたる御わたりにえねんすましき心ちのすれは参らんとも
おもはぬ院よりさるへき人々みな参るへきよし参らせ給へと三
位殿よりあれはそのきたあらはさてあてたらんひとり水とりは
かり参らせてわれはまいらしとなん思ふといへはけにさそ覚しめ
すへき事にてそあれと仰らるゝにまいらせ給はさらむもひかひ
かしきやうなり思ひねんしてなをまいらせたまふへきとて出し

たてられるはかはかりの事たに心にまかせぬ事と思ひながら出たつその日もなりて内大臣殿御ひんつらにまいらせ給ひて朝かれゐのみす巻あけて御ひむつらゆひまいらせらるゝみれはかはらぬかほしてみえさせ給ふもあはれなり暮はてぬれは行幸なりぬ御供にやかて引つ、けてまいりぬ中御門の門いるより思ひしにしるくかきくらさるかうりう寺に参るとてみいれしに我明くれ出入し門そかしをと、しのしはすの廿余日こそ堀河院にうつろはせ給ひしかそれに出けんま、にこそは有けめかきりの日ともおもはてそ出けむかし今は何事にてかはこの世にて又いらんすると思ひしを我身もおなし身ながら又たち帰りいるそ心うくかなくも覚ゆる参りつきて見れば局は大式三位殿おはせし所とそひる三位殿ありつれば御物のくを持って参りつるにとてそなたへ出んからくらへやをあゆみ過て今も少しのほる

三〇 夜御殿にさぶらひて

その夜も御そはにふしてみれば夜のおと、みるにみしよにかはらぬきましたるにそみのところ比かなとたにこそなしはしめたる御あたりなれば火とり水とりなどのわらはもちたりつる御まくらかみに左右にをかれたるそたかひたる事にてはある御かたはらにふしたるもかやうにてこそ宮のほらせ給はぬ夜なとは侍らひしかとおほえて哀にのみそみな人はよけにぬれとも我は物のみ思ひつ、けられて目もあはず滝口の名たいめむ御ゆとの

のはさま殿上の口にて申声そ聞ゆるほどにおほえさりしかと耳に立て聞ゆるうけせう時そうして尋へし心みねとはいひて時のふたにくひさす音す左近の陣の夜行てんめきたるありくも昔にもかはる事なし御帳のかたらひ見るにも先仰られし事とも思ひ出らるむかしをしのふいつれの時にか露かはく時あらんとおほえてかたしきの袖もぬれまさり枕の下につりしつかはり万の事に目のみたちてたかふ事なくおほけるにた、一所のすかたのみえさせ給はぬとおもふそかなしき御まえのふさせ給ひたる御方をみればいはけなきにておほとこのもりたるそかはらせおはせまし、とおほゆるをと、しの頃にかやうにてよるひる御かたはらに侍らひしに御心ちやませ給ひたりしかとも院よりあなかしこよりつ、しみて夜のおと、を出させ給はてしはしと申させ給ひしかはつれ／＼のま、によしなし物かたり昔今の事かたりきかせ給ひしおり殿のあとかたにより奉らせ給ひしかはそのまにてさふらはんはなめけにみくるしく覚えしかはおきあかりての給はんとせしみえ参らせしと思ふなめりとおほしてた、あれ木丁つくり出んとて御ひきをたかくなして陰にかくさせ給へりし御心のありかたさ今の心ちすいつのまにかはりける世のけしきそと万の人たちのそのかみの人ならぬ中に我はかりありし昔なからの人いかにむすひ置けるさきの世の契にかと物のみおもひつけられて衰しのひかたきこ、ちす

三二 萩の戸の花咲きみだれて

あけぬれはいつしかとおきて人々めつらしき所々見んとあれとくしてありかはいか、物のみおもひ出られぬへけはた、ほれてるたるに御前のおはしましていき／＼くろ戸の道をおれらしらぬにおしへよと仰せられて引きせ給ふ参りてみるに清涼殿しう殿仁壽いにしへにかはらすたいはん所こむめい昆明池ちの御さうし今みれば見し人にあひたる心地す弘徽殿に皇后宮おはしまし、を殿の御とのあところ成にたり黒戸の小はしとみ半菰のまへにうへおかせ給ひし前萩心のま、にゆく／＼とおひてみはるのありすけか

古今

君かうへし一村薄むしのねのしけきのへとも残にけるかなどいひけむも思ひ出たる御溝水の流になみたてる色々のはなともいとめでたき中にも萩の色こきさきみたれて朝の露玉をつらぬき夕のかせなひくけしきことに見ゆ是を見るにつけても御覧せましかはいかにめてさせ給はましと思ふに

萩の戸におもかはりせぬ花みても昔を忍ぶ袖そつゆけき

と思ひいたるを人にはんもおなし心なる人もなきにあはせて事のはしめにもりきこえむよしなれば承香殿をみやるにつけても思ひいてらるれば里につく／＼とおもひつ、け給はんとをしはかりてこれを奉りしかは

おもひやれ心そまよふ諸ともにみしはきの戸の花ときくにも

思へはさておなしさまにてありかせ給ふたにさおほすなりましてつく／＼とまさる、かたなくおもひつ、見はをしはかられてありしかくてあるし昔今すこし思ひ出らる、

三二 一 笛の譜のあと見れば

かくて長月になりぬ九日御せく節句参らせなとして十餘日にも成ぬつれ／＼なるひるつかたくらへやの方をみやれは御経をしへさせ給ふとてよみし経をよくした、めてとらせんと仰られて御おこなひのついでにふた間にてたちておはしまして認せさせ給ひて局におりたりしに御経した、めてもて参りてわらはれんとそおほしめしてあまりなるまでかしつかせ給ひし御事は思ひ出らる、に御まへにおはしましてわれいたきてさうしのゑ見せよと仰らるれば萬さむる心ちすれと朝かれるの御障子の絵御覽せさせありくに夜のおと、のかへにあけくれ目なれておほえんとおほしたりし樂を書てをしつけさせたまへりし笛のふのをたれたるあとのかへにあるを見つけたるぞ哀なる

笛のねのをされし壁の跡みれば過にし事は夢とおほゆる

かなしくて袖をかほにをしあつるをあやしげに御覽すれば心え

させ参らせしとてさりけなくもてなしつ、あくひをせられてかく目に涙のうきたると申せはみなしりてさふらふと仰らる、に哀にもかたしけなくもおほえさせ給へはいかにしらせ給へるぞと申せはほもし文字のりもしの事思ひ出たるなめりとおほせらる、は堀河院の御事をよく心えさせ給へると思ふもうつくしくて哀もさめぬる心地してそゑまる、かくて九月もはかなくすぎぬ

三三 一 大嘗会の御稷とて

十月十一日大嘗会の御稷とて天の下の人いとなみあひたり其日になりて播磨守なりさね御ひんつらに参りたり内の大い殿朝かれるのみすまきあけてなけしの上にあけてなけしの上に殿さふらはせ給ふゑんに左衛門佐いとあからなるうへのきぬきて事おきて、しはしありて御ひんつらはてかたに成て藏人参り女御たいめんいめんにまいらせ給へりとそうすれは聞せ給ひぬ事とます、めよといそかせ給ふ事なりて皇后宮なとめてたくしたてさせ給へり

三四 一 五節、臨時祭いとなみあひて

かやうに世のいとなみやう／＼過ぎて今は五節りん時のまつりいとなみあいたりことしの五節は大嘗会の年なれば例にも似す上達部かすそひていとめてたかるへき年といひあひたり女房たち我も／＼と御覽の日のわらはとてゆかしき事とらの日によす

てに例の事なれば殿上人かたぬき有へければいつれよりのほ
るへきととひあはれたればいらへせんともおほえす

三五 雪のあした思ひいでられて

一とせ限のたひなりければにや常より心に入てても興して参
の夜よりさわきありかせたまひてその夜帳臺の試などによふけ
にしかはつとめて御朝いの例よりもありしに雪降たりときかせ
給ふておほとのごもりおきて皇后宮もそのおりにおはしまし、
かは御かた／＼に御ふみ奉らせ給ふとて御前にさふらひしかは
日かけをもるともに作りてむすひるさせ給ひたりし事なとうへ
の御局にてむかしおもひ出られて物ゆかしうもなき心地してま
てなとわらはのほらんするなかはし例の事なればうちつくり
参りてつくるをそきやう殿のきさはしより清涼殿のうしとらの
すみなるなかはしとのつましてわたすさまむかしなから也御前め
つらしうおほして御覧すればはくる、まで御かたはらにさふらふ
にも雪のふりたるつとめてまたおほとのごもりたりしに雪かたく
ふりたるよしをきこしめしてその夜御かたはらにさふらひしか
は諸共にくし参らせて見しつとめてそかしいつも雪をめてたし
とおもふ中にことにてめてたかりしかはあやしの賤家たにそれに
つけて見ところこそは有にまいて玉鏡よとつくりみか、れたる
百敷のうちにて諸ともに御覧せしありさまなと絵かく身ならま
しかは露たかへす書て人にも見せまほしかりしかとをしあけさ

せ給へりしかは誠にふりつもりたりしさま梢あらん所はいつれ
を梅とわきかたけなりしし、う殿仁壽のまへなる竹の台おれぬと見
ゆるまでたはみたり御前の火たきやもうつもれたるさまして今
もかきくらし降さまこちたけなり滝口のほん本所そのまへのすい垣
などに降をきたる見所ある心ちしておりからなればにやこせん
のたちしハイせめての我心の見なしにやか、やきしまてに見るに我ねく
たれの姿まはゆくおほえしかは常よりみまほしきつとめてかな
と申たりしをおかしけに覚しめしていつもさそみゆると仰られ
てほ、系ませ給ひたりし御口つきむかひまいらせたるこ、ちす
るに五節のおりきたりしきなるより紅まてにほひたりし紅葉と
もに系ひそめのから衣とかやきたりし我きたる物の色あひ雪の
匂ひふさ／＼とこそめてたきにとみにもえ参らせ給はて御覧せ
しに滝口の本所のさうしなめり女の声にてすいかいのもとちか
くさし出てみるけはいしてあなゆ、しの雪のたかさやいか、せ
むするさをもえとりゆくまじきはとよといひしをきかせ給ひて
是きけいみしき大事出来にたりとこそおもひあつかひたれ雪の
めてたささめぬる心ちするルトとてわらはせ給ひしなと思ひ出され
てつく／＼と思ひむすほる、もた、も御覧ししらすあのうちへ
くもやりもちたる物こはせていて出てゆかぬさきにこはせ
よそれいへ／＼とひさむけさせ給へはうつくしさに萬さめぬる
心ちす御返事申なとするにまきれぬれはまかてなんといへはあ
なゆ、しなと物も御覧せてといひあひたり

三六 興ぜさせたまひしこと思ひいでられて

皇后宮^{令子}の御方つねよりは心ことに細殿の几帳などにも織物の三重の木丁に菊をむすひなどとして袖口きくもみち色くにこほし出されたりしかは過にし方例はさやうにみたれさせ給ふ事もないりしかをと、しもうへの御局に人くのきぬとものの中によしと御覧せんを上らう下らうともいはすそれかれをいたさんわざといたしたるとはなくてはつれてゐあひたるやうにせよとて御手つから人たち引すへて一のまには出せと仰られしかは皆人の袖口もりうたんなるに我からきぬのあか色にてさへありしかはひとりましりたらんかけしきおほえて是こそみくるしくやと申しかはとをくては何か見えむあへなとその人といふ書つけてもなしよもみえしあなちとせんとおほしめしたりし事なればとかなきやうにいひなさせ給ひてすへてくろとのかたはらにつ、きたる小はしとみより御覧してあの袖今すこしさし出せこれすこし引入よなともて興せさせ給ひし有さまいかてかおもひ出さるへきをなとおほえて目と、めらるれとまりてなど思ふ程に院よりせいそ堂^{消暑}の見かくらにはすけ二人さきさきも参ると仰られたるに一人そへんのすけまいる今一人は参らせ給ひなんやと殿仰らるればその出たちに事つけて出なんとおもひてむかへ人をこせよといはせたれはくる、ま、にをこせたり道すから心やすく夜のふけぬさきに出るにつけても物のみそ哀なること人何事かつかうまつりなれし御心に侍らひしおりふけしさまに所せかり

し心地せし物をまして出悦ひすとてわひさせんとおほしめしたりしおりはあやにくかりてとみに御手もふれさせ給はさりし物をいそきてまかてんと思ひしよの事そかし宮の御方にわたらせたまひて夜のふくるまで帰らせ給はさりしにかりうしてまちつけ参らせてす、め参らせしをいかて心えさせ給ひたりしにかまかつる事仰られしかはさにさふらふと申たりしをきかせ給ふまにうちふさせ給ひてこよひは明かたに何事もせんねむたしねなんと仰られていかにつきなうそ見あへる物かなと思ふ人あらんとほ、ゑませ給ひて仰られしかは我は何の心にかさまては思ひたまはん侍るたりとも人いつみなとこそわひしからめと申せはいつみもわひよいけもわひよ我くるしからすと仰られて御たみの上のうちふさせ給ひてみつかはしてあわれゆ、しににくけにおもひたるさまこそしるけれいか、せむくるしければうちふしてやすむそかしとしはし念せよかしあなわひしなど仰られてさまてもなき事をこちたけに仰られなしてわらはせ給ひし事なと思ひ出られなからまかてぬ

三七 をとめの姿思ひいでられて

つとめてかたぬきまたしからんと思ひるたる程にかみつかひうつくしけなる文これまいらせん内にもちて参りてさふらひつれば出させ給ひにければこち参りさふらひつるなりとてさしいれたりおもひかけすとおもふにやまと殿よりといふとりてみれば

そのかみのをとめの姿おもひ出ていと、恋しき雲の上人とそ書たる

そのかみの忘かたさに雲の上もいつる日高くおとろかす哉とそか、れぬるに小安殿の行幸とての、しりあひたり里よりやかて参る大嘗会の事か、すともおもひやるへしみな人しりたる事なればこまかにか、す

二八 御神楽の夜になりて

御神楽の夜に成ぬれば事のさま内侍所のみかくらにたかふ事なしこれは今すこしいまめかしくみゆるみな人たちを小忌のすかたにてあかひもかけ日蔭のいとなまめかしく見ゆるにかさしのはなの有さま見る臨時の祭みる心ちする皆座につきてをのをすへき事ともとりくにせらるゝに殿も本末のひやうしとり給ふそうるわしきひのそうそくなる殿は今すこし人たちの座よりはあかりて御さしきなればそれにるさせ給ひたりつかひのかさしの花さ、せ給ひたるみるにさまかはりてめてたきもとのひやうしあせちの中納言宗通の子の中將のふみちことそのおと、のひちうのかみこれみちひちりきあきの前しつねた、あまたるたりしを事なかければか、すかくて御神楽はしまりぬればもとす

系のはうしの音さはかりおほきにたかき所にひ、きあひたり声き、しらぬ耳にもめてたしみかくらやうくはてかたなると聞ゆせんさいく万さいくとうたふこそあまてる神の岩戸にこもらせ給はさりけんもことわりと聞ゆ我君のかくいはけなき御よはひに世をたもたせ給ふ伊勢御神もまもりはく、み奉らせ給ふらむと位たもたせ給はん年の数そひす系はなかるのうらのはるはると濱の真砂のかすもつきぬへくみもすそ川の流いよくひさしく位の山の年へさせ給はん誠にしら玉椿八千世にちよをそふる春秋まで四方の海の浪の音静にみえたりかくてみあそひはてかたに成ぬれば殿御こと治部卿もつなひははうしもとのことくむねた、の中納言宗忠しやうの笛内大臣雅實の御子の少将まさた、笛ひちりきもとの人々つかひにて殿の御聲にてまんさいらく出せとてわれうちそひさせ給ひふたかへりはかりにてあなたうといせのうみなどみたれあそはせ給ふむねた、の中納言拍子とりて出す事はてぬれば各さうそくぬきかへさせ給ふ殿の御琴の音つまをとなへてならすめてたしみなく人々ろくかたにかけたたつに殿は人には今ひとときはまさり参らせて御したかさねうち御衣そかたにいたさせ給ひたるを見まいらすれば三笠の山にさし出る望月の世、をへてすみのほるらんやうに見ゆ御年のほと五十など誠に盛なる桜の花の咲と、のほりたらむを見る心地す御よそほひ天りんしやうわうかくやとおほえさせ給ふた、せ給ふとてたまはりたる物なりをきてたつへからすなめけなりとて御かたにかけなからおはしまして大しやうしの前にて御子の中將殿をま

いれこれ給はれとてゆつり参らせ給ふ見参らすれば二葉の松の
千世に栄へむ御ゆくさき雲わけてなりのほらせ給はん程たのも
しく見えたり事はてぬれは車をたて、やまかてぬ

三九 周防内侍のもとへ

又の日よへの名残めつらしく心にかかりておほゆるにも先む
かしの御名残おもひ出られさせ給へは周防内侍のもとへたひた
ひおほえてけにと思ひあはせらるらむとていひやる

めつらしき豊のあかりの日影にもなれにし雲の上ぞ恋しき
かへし

おもひやる豊の明のくまなきもよそなる人の袖そそほつる

四〇 つごもりになりぬれは

つごもりに成ぬれは朔日の御まかなひすへきよし仰られたれ
はいそきあひたるにも我はた、わかれやいさとのみおほえてつ
こもりの夜内へ参るとて堀河院通るに二条の大路堀河なとかい
すみ物さはかしけに人の出入たるけしきみえず目のみ先と、ま
りて

後拾遺
ぬしなしとこたふる人もなけれども宿のけしきそいふに増れる

とよみけむふることさへ思ひ出らるうちみん女房の身にてあ
まり物しりかほにくしなとそそしりあはんすらむかやうの法
問のみちなどさへ朝夕のよしなし物語につねに仰られきこえさ
せ給ひしかは事のありさまおもひ出らる、ま、に書たる也もと
くへからす忍ひまいらせさらん人はなにとかはみん我はた、
一所の御心のありかたくなつかしう女房しうなとこそかくはお
はしまさぬとおほえ給ひしかわすらる、世なくおほゆるま、に
かきつけられてぞ

歎つ、年のくれなは無人の別やいと、とをくなりなむ

四一 尾花まねきたちて

十月十余日の程に里にゐる萬の事につけてもおはしまさまし
かはと常よりもしのはれさせ給へは御すかたにこそみゑさせ給
はねとおはします所そかしといへは香隆寺にまいるとてみれば
木々の梢ももみちにけり外のよりは色ふかく見ゆれば

いにしへをこふる涙のそむればや紅葉の色もことに見ゆ覧
御はかにまりたるにおはなのうすしろく成てまねきたちてみゆ

るか所からさかりなるよりもかゝるしも哀なりさはかりわれも
われもと男女のつかふまつりにかくはるかなる山の麓になり
つかうまつりし人もひとりたになくた、一所まねきた、せ給ひ
たれともとまる人もなくてと思ふに大かた涙せきかねてかひな
き御跡はかりたに霧ふたかりて見えさせ給はず

花薄まねくとまる人そなきけふりと成し後はかりして

たつね入心のうちをしりかほにまねくお花をみるそくるしき

はな薄きくたに哀つきせぬによそに涙を思ひこそやれ

これがある人いひおこせたり

いかてかく書と、め釵みる人の涙にむせてせきもやらぬに

かへし

思ひやれなくさむやとて書置しことのはさへそみれば悲しき

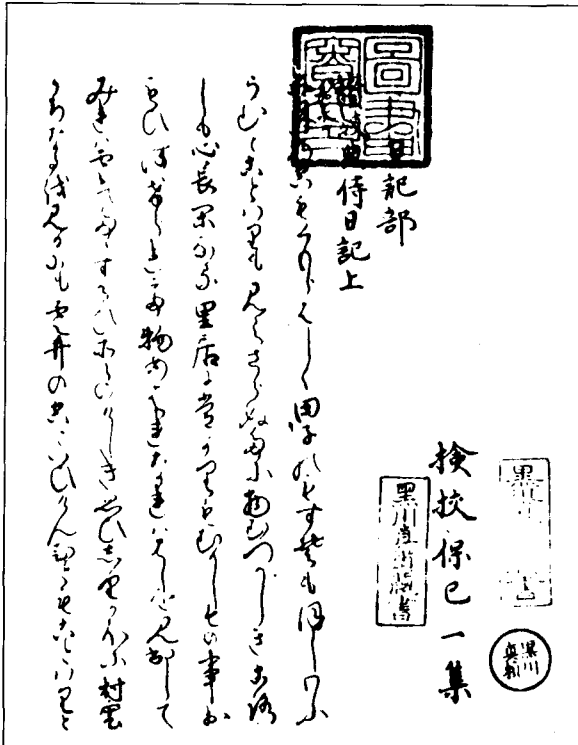
四二 常陸殿とかたらひ暮らして

我おなし心にしのひ参らせん人と是をもろともにみはやと思
ひまはずに忍ひまいらせぬ人は誰かはあるされと我をあひおも

はさらむ人に見せたらは世にわつらはしくもれ聞えんもよしな
しまたあひおもひたらん人もかたうとなからん人ははえな
き心ちすれば此みかとにあひたる人はあなれとおもひむかへたれば思
かりそ此みかとにあひたる人はあなれとおもひむかへたれば思
ふもしるく哀に心やすくわたらせたり日くらしにかきらひくら
して

(翻刻者) 三谷幸子・神徳紀公子・高岡友子・松尾隆子・

柳井美影



(本学助教授一国文学)